

感じを受ける、此感じは畫家の個性に應じて誰も一樣ではないが、各自何等かの印象を感得する、それを畫に現はさうと云ふのである。即ち自然の意味、氣分と云ふものが畫に現はれて來なければならぬ、それで詩的趣味が傳へられるのであるが、此點が今日の寫生畫家が主として研究して居る處である。

それ故様式派の方は形を主とし、自然派の方は感じを主とするものと概言することが出来る。之が優劣は果して如何なるものであるかと云へば、何れにも特有の長處があることは無論である、又畫家各自の見識と態度にも依るのであるから、一概に是非するわけには行かない。又此兩派の長處のみを折衷して別に新しい方面へ向はうとして居る畫家もあるのである、即ち裝飾畫的の風景畫の如きが、それである。今日に於ても様式派の描法を以て進んで行く畫家も尠なくないのであるから、研究家の方針としては最初は舊來の方法に依つて畫上の條件や描法を充分研究し、練習と經驗とを得るに従つて追々新らしき方面即ち印象派の描法へまでも歩を進め

て益々學識を廣め技量を磨くやうにしたいのである。

此印象派の畫に就ては、私の書生時代に米國の或美術批評家が日本へ來たことがあつたが、此人は私に語つて、印象派の描法は青年畫家には甚だ危険である、五十を越したならば描いてもよいが、それまでは専ら舊派の方法を研究することを君に勧めると注意してくれたのであつた。

此批評家の言は暫く措き、現在の有様に於て印象派の方法には未だ不充分の點あるを免れぬことは西洋畫壇に於ける一般の評もあることゆゑ、畫家が自分の蓋せる技量に依つて益々此派の開拓に任じ完全なるものとなすことは畫家の本分として當然のことであるが、未だ技量も經驗も不充分なる研究中の者が、單に模倣的に此派の描法を取るが如きことは大いに考ふべきことであるから、右の批評家の注意は必ずしも偏狭なる思想ではないと私は思ふのである。

元來印象派の畫風は近代の創作に依るか、如くに一般に考へらるゝ有様であるが、併し往古埃及人は物の形を描いて記號を作り、又漢字の根元も

多く物の形より轉化したものであると云ふやうに、印象派なるものは既に人類の存在と共に早く現はれて居たものと見ることも出来るのであるから、マネーやモネーが現はれてから印象派なるものが創めて出たものと一概に決めるわけには行かないと云ふ論もある。

それで印象と云ふ名稱はモネーが一千八百七十四年即ち我明治七年に「印象」と題する畫を展覽會に出品したのが起りて、印象の事實は昔から存在して居つても、文字に現はれたのは全く此時からである。と云ふことである。只此印象と云ふ文字の使用に就ては曖昧である。コンステール、ターナーあたりも印象派の中に入れ、又近頃の後期印象派なども同じく印象派と呼ばれて居る。それで主義に於ては同じく印象派であらうとも描法は必ずしも同一でない。併し元々畫は印象によらずには描けるものではないから、昔の畫も今の畫も精神に於ては變りなく、只描法に於て違ふ處に今の印象派が存在するものと見ても差支へないのである。

印象派なるものを一言に説明すれば、自然を只寫眞の如くに描かず、觀者

に實景の感を與へて自然の趣を偲ばしめるのが目的である。詰り眼と心との兩方から畫を見せると云ふのである。それで此目的に應じて印象派は自家一流の描法を用ひて居るのであるが、併し感じと氣分とを現はすためならば、それに適するやうに場合に應じて種々なる描法を考究すればよいのであるから、必ずしも印象派の描法を決めて特別なる畫風を示す必要はないと論じて居る人もある。

印象派に所謂點描と稱へて種々なる色を點綴して空氣や色彩の活躍を現はす方法がある。之は印象派に於て甚だ六かしい技術として居るのであるが、理論上色彩は光線の微細なる振動に因て現はれるものであるから、此點描は克く實際に適合した方法である。と云はれる。併し之が單に慣用手段になつて、印象派の畫家は皆此描法に依るものゝやうに決まつてしまつては無論不可であるから、研究家は克く此點に注意して、手段が餘り明白地にならぬやうに、結果を第一として此方法を利用すべきである。

點描を應用すべき場合は畫題の性質が此描法に能く適當するものに限

るのである。即ち形が餘り明瞭でなく又色彩の透明とか深味とか現はれずとも差支へないものに對して之を用ひればよいのである。

些事のやうではあるが、油畫に於て點描の畫には普通の畫よりも埃が多く積り、掃除にも非常に困難で、凹處に溜まつた埃は迎も綺麗には取り切れぬから、畫の發色は年月と共に夥しく害される不利があると云つて、此描法に不賛成を唱へる畫家もある。併し又印象派の方から云はすれば、從來の畫法の如き、入用の色を混ぜ合せて、大筆に着けて之を平らに畫面に塗ることとは極めて拙劣なる方法として斥けるのであるが、之は要するに點描に於ては物の形を描くと云ふよりも只純粹の色を以て點を小さく打ち乍ら形を現はして行くのであるから、根本に於て既に相違して居るのである。

それゆゑ在來の描法と點描との優劣に就ては一概に評するわけには行かぬのであるが、結果から見て、點描の畫は往々發色にも調子にも變化乏しく、又之を額に掲げるに於て、點描の凸面のみが光を受ける關係から全体に沈んだる趣を現はすことが尙ほ研究を要すべき缺點であらうと思はれる。

空氣を現はす方法に於ても、時としては霧に包まれたる如き觀を呈するは、過ぎたるは尙ほ及ばざるの嫌がないでもない。

佳麗なる色彩としての條件は統一、活躍、幅員等の外に殊に明快と深遠とが是非とも缺く可からざるものである。此中、活躍の感じは點描に於て現はすことが出来る、幅員と統一の感じも、點綴の迹を餘り目立たぬやう注意し、且つ離れて眺むるに於ては幾分之を現はすことが出来るのであるが、明快と深遠の感じを現はそうとするには點描では一寸六かしいのである。

色彩の透明が點描に於て充分現はせぬことも亦缺點の一である。之は元來色彩の透明を現はす方法として先輩が研究した手段に點描は全く相反して居るのであるから、現はれぬのも仕方がないのである。

點描の手段には尙ほ研究の餘地はあるのであるが、此描法が何うしても適せぬ畫題としては水面、水に映る影又一様に廣き陰、其他凡て調子の弱い畫の場合である。空にも亦點描は寧ろ適せぬのである。地面の如き粗雜なる趣を現はすものには此描法も好結果を奏するものである。

印象派の描法は大体に於て斯う云ふ性質のものであるから、之を研究しようと思ふ人は、書題に應じて適否得失を考へなければならぬ。先づ初めから餘り極端なる印象派の描法は控へた方がよいのである。自分に根據がない時は、極端に走るに於ては往々破壊に陥るからである。將又舊派の描法に於ても、之は元より多年研究の結果として成績を今に遺したのであるから、強ひて之を無視すべき理由はないのである。

只畫家の立場としては毎も新らしき方面に注意すべきは元より當然のことである。例へば自然派なるものをコンステイブルが描き出した當時に於て、畫術は從來の研究と傳承とにより、充分進歩して居り、又古大家の傑作も元より數多く遺されて居たのであるが、併しコンステイブルは別に自分の考へを持つて居た、ために徒らに古人の足跡に頼らず又現狀に安んぜず、新たに自然派を創り出した處が威らしいのである。

古來大家の爲した迹を見ても、只單に技量に秀で、居たと云ふばかりでなく、必ず何物か人と異なる方面に目を着けて之に成功し、若くは未成のま

ゝでも種を後世に遺して居ることが分るのである。

それゆゑ美術隆盛を極めて大家が現はれると云ふことも、實際其通りになつて居るのではあるが、併し之は美術が盛んになつた、ために現はれると云ふよりも、寧ろ美術上の在來の手段が研究し盡されて最早此上は新らしき方面を考へなければ他に方法がないと云ふ場合に、卒先して新生面に着手して成功した畫家が大家となつて後世に知られるのであると考へた方が至當であらう。

畫は一通りの處までは誰でも進んで行く、其上へ突き抜ける人が即ち威らしいのであると云ふことも即ち之れである。無論上手下手は比較上の談であるけれども、若し非常に上へ突き抜けることの出來た畫家は一代の大家としては認められるのである。

それゆゑ畫術の研究は何よりも先づ熱心でなければならぬ。實際に徴しても、正式の教育を受けた畫家が必ずしも好成績を得ない、大家は反つて不完全なる教育を受けたる者の中より其人の熱心の結果として現はれ

ることは古今東西其例尠なくないのである。

それゆゑ我々は研究上先輩の遺した教訓や練磨の方法に就て遺憾なきを期すると共に、又新らしき方面に對して片時も注意を怠つてはならぬのである。此注意を缺くに於ては、一國としては其國の美術は衰へ、一個人としては其人の技術は落ちるのである。先輩に就て見ても、皆此心掛けを以て成功して居ることが分るのである。ダグインチは古い壁の雨の蝨を深く研究し、レーノルツは他人の作に現はれる新らしき試みは毎も逃さず研究し、ゲンスボローは石を積んで山を作り鏡を以て水となして意匠を練つたと云ふことである。

風景畫の變遷は皆新らしき試みの結果である。後期印象派や未來派の方法は現時に於ける新らしき試みで、之から結果を得やうとして居るのである。尙ほ今後に於ても更に幾多の新らしき方面が発見されるに違ひないのであるから、研究家諸君は常に油斷なく此方針に依つて進まれんことを希望するのである。そのため研究家の心得として、自分の畫は自分の考

へに依つて描くのであるから他人の眞似ではないと云ふ自信がなければならぬ。將た又既に研究し盡されたる畫術には何程上達するも、自分の特色を發揮することは容易でないから、何なりとも新らしい方面へ着目する熱心がなければならぬ。其の爲め世間からは如何なる批難攻撃を受くとも毫も屈することなき勇氣がなければならぬ。

コロが初めて自分の畫をサロンへ出品することの出來たのは年既に五十に達して居つた。ミレーは終生不遇で暮らした、め葬式の時に其費用さへ貯へがなかつた。生前ミレーは其作「聖母頌榮」の圖を八十圓に賣り度いと云つて方々へ頼んで見たが誰も買手が無い、然るに死んだ後漸く眞價を認めらるゝに及んで之が三十七万圓に賣れて居る。ホイッスラーの作は當時誰も顧るものなく、ラスキンの如きは之を評して畫ではないと罵倒したのであつた。併し今日に於ては何れも有名の傑作として世間から認められて居るのである。是等は皆畫家の自信熱心勇氣の結果である。

寫生新說(終)

大正三年六月二十五日印刷  
大正三年七月五日發行



發行所

寫生新說  
定價金壹圓參拾錢

著作者	石川 欽一 郎
發行者	東京市赤坂區溜池町三十三番地 田口 鏡次 郎
印刷者	東京市芝區榮町十五番地 一 增 定 次 郎
印刷所	東京市芝區榮町十五番地 日本美術學院印刷部

東京市赤坂區溜池町三十三番地  
日本美術學院  
電話新橋一八七九番  
振替東京五八八六番

▼水彩研究の一大寶典▲  
石井柏亭先生著 (第三版出來)

我が水彩

著彩書、水彩書寫真版二十四面  
スケッチ凸版十六種、箱入美裝  
價一圓八十五錢 送料八錢

但し支那滿洲朝鮮臺灣は廿錢増しの事

批評

東京朝日新聞曰 新らしき頭腦と新らしき腕とを以て我が洋書界に卓然頭角を現はし來れるものは石井柏亭なり此書は柏亭の力量を見るべきものにして水彩書を學ばんとする者を啓發せんとしたるものなり水彩畫の起原に筆を起し「スケッチ」「構圖」「色彩」「静物畫」「風景寫生」「海の畫」「人物畫」「屋内の畫」「戸外の人物」等の諸題目に一々著者得意の作物を挿入して説明と感想とを加へ其畫面の光彩あるのみならず其文章の流麗なる畫界稀に見るの才筆なり

美術週報曰 從來此種の書物は初學者の手ほどき位に過ぎなかつたが石井氏の著書は作家と論客との藝術論とも云ふべく初學者にも専門家間にも興味ある讀物である二十四葉の挿入畫一々深切なる選擇が加はつて實に個人展覽會を見るやうである、其色彩版の如き頗る精巧を極めたもので製版印刷に意を用ひた事察するに餘りある。

東京市赤坂區本館電話一八七九番  
溜池町三十三區日本美術學院電話一八七九番

丸山晚霞先生著 再版出來

水彩新天地

▲菊版背クローヌ箱入美本  
▲著彩書九面水彩寫真版十八  
鉛筆スケッチ凸版等廿五種  
▲價壹圓八拾五錢 送料八錢

但し支那滿洲朝鮮臺灣は廿錢増しの事

批評

國民新聞曰 著者の名は水彩畫といふ名と共にすぐ吾々の頭腦に浮んで來る親しい名前である即ち一家を成した有名な水彩畫家である事は言ふを要しないのである著者は緒言に於て新といふ文字に就て「自己の經驗と所信とを人に傳へる其仕事を我のみが新しい仕事といふ意味である」と云つてゐるが其經驗と所信とを十分に發揮して水彩畫を學ぶ人の爲に親切に説き且つ論じて啓發する所少からざる者である二十有餘の彩色した挿畫は皆著者の筆になつた立派なもの

萬朝報曰 (前略)繪畫の意義水畫の用途より始めて印象畫と理相派、人体と風景、自然の感化色、都會の畫材等について著者獨得の畫論を行ふ、一家言として繪を好む者を益するに足らん(後畧)

大阪朝日曰 (前略)頗る行届きたる注意と一家の見識とを包括して在來同種の著書とは少しく其類を畧にしたり(後畧)

東京市赤坂區本館電話一八七九番  
溜池町三十三區日本美術學院電話一八七九番

# 未曾有の大畫譜

畫學補修 鉛筆畫譜

執筆者 石井柏亭 石川寅光 中澤弘光 坂本繁次郎 森田恒友

臺紙堅八寸五分横六寸十二面解説書附價七十錢送料八錢

## 編者の主張

一かどの畫家でありながら一個の藝術品として鑑賞に値する程の墨畫の出來なものは多い。日本の畫家でも素人でも畫と云へばすぐに彩畫を想つて、墨畫語を換ふれば素描畫に冷淡なのが毎である。これは甚遺憾なことである。東洋の水墨趣味の遺傳のある日本人が、洋風の墨畫趣味を解し得ぬ筆はなさうに思はれる。その眼の開けぬのはまだ充分それに注意しない爲であらう。今迄學校の圖畫教科用として鉛筆畫手本の類が出て居ないではない。がそれはあまりに簡單に過ぎたり、また典型に陥つたりして居た。今特に墨畫に造詣ある數氏の作を念入りに複製した此鉛筆畫譜は、墨畫の練習者にとつて學校の課程以外の好參考となるであらうし、また一般愛畫家にとつては、珍しい好畫集として鑑賞する可きであると思ふ。

東京市赤坂區 日本美術學院 電話新橋一七八九番 池沼町三十三番

小杉未醒先生著 初版將盡

# 畫筆の跡

菊版箱入美裝、紙數約三百頁  
油繪水彩原色版及び寫眞三十面入  
定價壹圓九十五錢、送料拾貳錢  
但し支那滿洲朝鮮臺灣は廿錢増しの事

## 批評

東京朝日新聞曰 著者が歐洲漫遊の記念にして旅中の漫筆、其の文其の畫と相並びて頗る興趣の饒なるを見る、「歐洲航路にて」「巴里にて」「フランスの田舎」「ロンドン及ブラッセル」「スペインの旅」「イタリアの旅」「獨逸及露西亞」「歸途」の諸篇より成り終りに「記念評論」と題し其の見たる繪畫につき八十餘家に對して加へたる簡潔なる評論を掲げたり

讀賣新聞曰 (前畧)世界の風光人情を知らんと欲するものは集中の記行文を讀み、風俗習慣を知らんと欲するものはスケッチを見、而して氏が歐米漫遊によりて得たる美術上の新傾向を知らんと欲する者はその三色版の插畫によつて豫想外の満足を得る事であらう

東京市赤坂區 日本美術學院 電話新橋一七八九番 池沼町三十三番



鏑木清方先生近業の逸品

清方美人畫譜

十二枚箱入 密紙寸法 縦八寸  
五分 横六寸 缺入 價一圓三十  
錢 送料 八錢 木板 數丁 度 刷五  
枚 原色版七枚  
詳細なる解説書を添ふ

美人を活寫して可憐濃艶、其表情其姿態の自然なる、其描法の秀拔なる今代清方先生の右に出づるものなし、徳川時代より明治の中期にわたれる浮世繪は既に過去のものとなり、今や現代の風俗畫として萬世に傳ふべき藝術となれり、而して此風俗畫は實に先生に於て大成せられたる觀あり、本院茲に先生が最も得意とする傑作十二種を複製して世に出す、木版刷は斯道の名工西村が技術の極粹を盡し原色版は日能製版所が新輸入の器械を用ひて印刷せるもの、共に肉筆と異なる處なし、畫道修業者は絶好の标本となすべく、愛畫者は額面に仕立て或ひは壁間に掲げて鑑賞せられよ。

東京池田町三十三區 日本美術學院 電話新橋一七八九番  
東京東區新橋一七八九番

349

336

終